

## ● 関西

### 嶋田邦雄

文化にとっての危機の時代はその創り手と同時に、受け手にも本来の姿勢、在り方を問いかける。関西では2014年、コンサートホールの減少を受けるように、リサイタルなど小規模演奏会の数は減った。しかし、厳しい状況に置かれているオーケストラの場合、聴衆の熱い声援でこれまでにない“盛況？”を経験したところが多い。文化創造の原点の一つ＝聴衆が危機を自分の問題としてとらえ始めた表れかも知れない。大阪市の補助金カットで困難に直面している「文楽」の入場者も目に見えて増え、定例公演では期間中、ほぼ満席状態が続いた。「ホワイト・アウト状態から抜け出せるのでは？」「いや、徒花に過ぎない」など論議も盛んだが、それほどに危機が深化している反映とも言える。

オーケストラでは大阪フィルハーモニー交響楽団が定期公演の会場を14年4月から座席数が1000席も多いフェスティバルホールに移した。初回の4月公演では井上道義がショスタコーヴィチ「交響曲第4番」を指揮、満席の会場は大きな拍手に包まれた。井上はこの直後、病気療養のため10月公演まで休養に入ったが、ファンからの激励メッセージが数多く寄せられ、定期公演（2回）はそれ以後もほぼ満席状態が続いている。11月公演には94歳のヴィンシャーマンの指揮でパッハ「マタイ受難曲」を演奏するなど話題を提供した。関西フィルハーモニー管弦楽団は音楽監督のオーギュスタン・デュメイ、首席指揮者・藤岡幸夫、桂冠名誉指揮者・飯守泰次郎のコンビで、着実に実績を積み重ねている。飯守指揮による6月公演でのワーグナー「ジークフリート第3幕」の演奏会形式上演など、多くの聴衆に感銘を与えたものが並ぶ。2015年にはヨーロッパへ演奏旅行。デュメイらのタクトで成熟した関フィル・トーンを世界の舞台で披露する。楽団員の意気も高い。

日本センチュリー交響楽団は飯森範親を首席指揮者に迎え、新しい態勢で若々しい活動を始めた。演奏会のプログラムは古典、ロマン派を中心に、マーラーなども取り上げ、演奏力量の増幅に力を入れる一方、藤岡幸夫・関西フィルと組んで“大坂秋の陣”と銘打った公演（9月15日）を企画。セット券で関西フィル（14時）と飯森・日本センチュリー（17時）の両公演を聴く趣向だ。それぞれの楽団がモーツァルトとチャイコフスキーの交響曲を演奏し、客席を沸かせた。15年には大阪交響楽団と大阪フィルハーモニー交響楽団を加えた“大坂春の陣”も計画している。ザ・シンフォニーホールでの定期演奏会を15年度（4月から）は2回公演にし、選択の幅を広げることで、より多くの聴衆獲得に挑戦する。大阪交響楽団は音楽監督・児玉宏と常任指揮者・寺岡清高のタクトで充実した演奏内容をさらに多彩にしている。14年がシェイクスピア生誕450年にあたることから、公演ごとに1曲はシェイクスピアに因んだ曲を入れる（例えばキンポー・イシイ指揮の7月公演ではベルリオーズの「序曲リア王」など）企画や、継続中の“忘れられた名曲発掘”（児玉・指揮、福岡洗太郎・ピアノによる3月公演でのヘルマン・ゲッツ「ピアノ協奏曲第2番」など）で声価を高めている。児玉音楽監督との契約が2016年3月で満了するのを機に、同4月からは外山雄三をミュージック・アドヴァイザーに迎え

る。外山は演奏会での指揮（年1-2回）も担当、武満徹など日本人作曲家再評価の企画も。大編成の曲は現状では苦しいなどの問題もあるが、知恵を凝らして内容の濃い演奏を実現する。

兵庫芸術文化センター管弦楽団は14年が契約団員の交替期に当たり、多くの団員が入れ替わった。しかし、昼間の3回公演（金-日）に詰めかける聴衆の熱気は相変わらず。ある意味でこの熱気がオーケストラを育てている面もあるといえよう。芸術監督の佐渡裕が公演の要所、要所を締め、内外の客演指揮者を豊富に揃えることで定期演奏会に魅力を持たせるラインアップは成功している。後は定期的に入れ替わるオーケストラのメンバーが1日も早く独自の音色で精度の高い演奏を実現するか、にかかっているが、この面でも合格点に近い成果を上げている。京都市交響楽団は関西で兵庫芸術文化センター管弦楽団と並んで“独り勝ち”と羨まれる盛況が続いている。常任指揮者兼ミュージック・アドヴァイザーの広上淳一を中心に、高関健（常任首席客演指揮者）、下野竜也（常任客演指揮者）や内外の指揮者が幅広いレパートリーで魅力的な定期公演を構成。ジェームズ・ジャッドが指揮した6月公演でのエルガー「交響曲「エニグマ」」など印象に残る演奏が多い。質の高い演奏内容をさらに高める努力の継続が確実に実を結んでいる。

オペラ上演も彩り豊かだった。関西二期会の「こうもり」（5月）と「ドン・カルロ」（10月）、小編成のアンサンブル・オペラによる「ドン・パスクァーレ」と「友人フリッツ」、関西歌劇団の「ラ・ボエーム」（6月）、びわ湖ホール「死の都」（3月）と「リゴレット」（10月）、兵庫芸術文化センターの「コジファン・トゥッテ」（7月）、地域オペラでレヴェルの高い公演を続けるみつなかオペラ「清教徒」（9月）、堺シティオペラの「黄金の国」（11月）、さらにカレッジ・オペラハウスの「鬼娘恋首引」・「カーリユー・リヴァー」（10月）、日本オペラプロジェクトの「ちゃんちき」（3月）など、多様な作品が上演された。演出も奇を衒わずに、現代の社会感覚との交差点上に作品の面白さを引き出した舞台が多い。

室内オーケストラも中身の濃い活躍で注目された。日本テレマン協会のフォルテピアノとクラシカル楽器による「ベートーヴェン・ピアノ協奏曲全曲公演」（FP・高田泰治、指揮・延原武春）は古楽器を用いて実に新鮮な世界を引き出した。神戸市室内合奏団は音楽史の中で重要な位置を占めながら、あまり演奏されない作品を取り上げる作業を続けている。12月定期演奏会でのヴァーゲンザイル「交響曲二長調」やハイドン「ノットゥルノ第2番」など、その魅力的な内容に聴衆は熱い拍手を送った。齊藤一郎を音楽監督に迎えた京都フィルハーモニー室内合奏団や、矢野正浩を中心にレオン・シュピラーやローレンツ・ナストゥリカラを客演指揮、ソロに迎えて内容の濃い演奏活動を続けるアンサンブル神戸、当間修一を中心にバロックから現代曲まで幅広いレパートリーに挑戦し続ける大阪コレギウム・ムジクムなどが評価を高めている。

一味違う興味深い演奏会として「ヨーゼフ・ラスカ没後50年メモリアル・コンサート」も記憶に留めたい。数奇な運命を辿って1923年来日、宝塚音楽歌劇学校で教授を務めるとともに、宝塚管弦楽団の指揮者としてブルックナー「交響曲第4番」などを日本初演（1931年）したオーストリアの作曲家、ヨーゼフ・ラスカ（1886-1964）を記念した企画。ラスカは万葉集に曲を付けた歌曲やピアノ曲など多くの作品も残しており、特徴的な曲が披露された。演奏会（11月24日）には関西の若手演奏家が出演。関西ゆかりのラスカを通して、日本音楽史の忘れられた側面に光を当てた。